

本県の運動部活動生に対する意識調査
— 2020年「燃ゆる感動鹿児島国体」にむけて —

ラ・サール高等学校
渡 邊 貴 文

1 緒言

本県では2019年（平成31年）南九州ブロックインターハイ、2020年（平成32年）第75回国民体育大会「燃ゆる感動鹿児島国体」の開催を予定している。

本県の競技力向上対策については、国体での低迷を受け、平成10年に「競技力向上緊急3か年計画」を策定し、以降、「競技力向上5か年計画」・「第2期競技力向上5か年計画」・「第3期競技力向上5か年計画」が策定されてきた。

現在の「第3期競技力向上5か年計画」では、平成23年度から平成27年度において、これまでの成果と課題を踏まえ、①指導体制の整備・充実、②選手の育成と強化、③スポーツ環境の整備・充実の3つを柱とした競技力向上に取り組んでいる。

また、第75回国民体育大会に向けては、平成24年7月に「次期国体に向けた競技力向上計画」を策定し、競技団体の強化等を図る「推進体制の確立」、指導者の計画的な養成を図る「指導体制の確立」、選手の発掘・育成・強化を計画的に行う「選手強化体制の整備」の3つの項目を掲げ、国体開催までの期間を育成期、強化期、充実期の3期に分け、それぞれ計画的・段階的に競技力向上を推進しているところである。

昭和47年の第27回国民体育大会「太陽国体」を本県において開催し、天皇杯を獲得した。昭和46年から昭和51年の6年間で5度の10位以内を獲得するなど、当時は全国上位の成績を収めていた。しかし、平成11年熊本県開催時の天皇杯19位や平成16年岡山県開催時の皇后杯13位を最高に、近年ではほぼ30位前後で推移しており、昨年の「長崎がんばらん国体」においては天皇杯27位、皇后杯26位であった。（図1）

全国高校総体上位入賞者数（個人・団体）においては、平成21年の47を最高に減少傾向にある。昨年度は30まで巻き返してはいるが、コンスタントに好成績を保っている状態とは言えない（図2）。

鹿児島県で開催される南九州ブロックインターハイにおいては上位入賞者数過去最高、国民体育大会においては天皇杯・皇后杯を獲得するという目標を達成するため競技力向上は喫緊の課題である。

図1 国民体育大会天皇杯・皇后杯順位

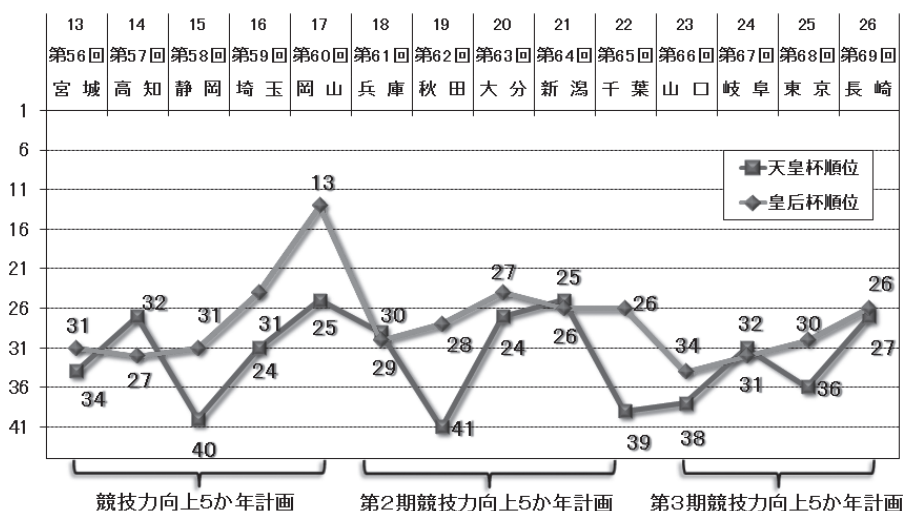
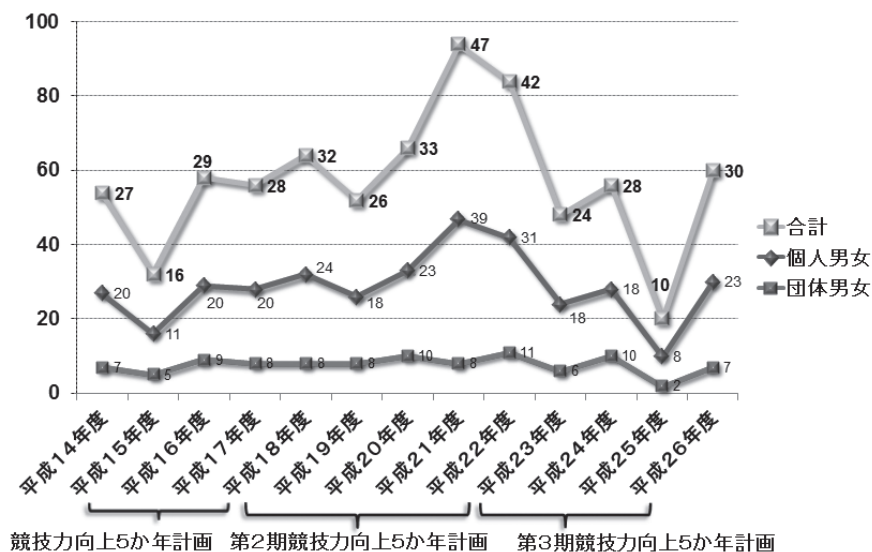


図2 全国高校総体上位入賞者数（鹿児島県関係分）



2 目的

本研究は、運動部活動に所属している高校生（IH 出場者、IH 不出場者）を対象に、小学校や中学校、高校段階において、その当時行っているスポーツに対しての「環境」「指導体制」「意識」についてアンケート調査をすることによって現状を把握し、今後の鹿児島県における運動部活動のあり方、課題、方向性を明らかにし、より一層の発展・充実、競技力の向上、さらには前述の目標を達成するための一助となることを目的とする。

3 アンケート調査の概要

- (1) 調査期間：2014 年 6 月 1 日～2014 年 8 月 31 日
- (2) 調査対象：鹿児島県の運動部活動に所属する高校 1 年生～3 年生 985 名
2014 年度の南関東で行われた全国高校総体に出場したか否かで区別した。
IH 出場校 44 校 474 名 IH 不出場校 12 校 511 名
- (3) 調査内容：質問紙法による無記名アンケート調査を実施した。
- (4) 調査結果の実態
 - ① 回答者数：985 名（回収率 100%）
 - ② 性別：男子 58.5% 女子 41.4%
 - ③ 学年：高校 1 年生 7.7% 高校 2 年生 15.2% 高校 3 年生 76.9%
 - ④ スポーツ歴
「小学校から」 IH 出場者 59.1% IH 不出場者 37.2%
「中学校から」 IH 出場者 16.7% IH 不出場者 28.2%
「高校から」 IH 出場者 23.6% IH 不出場者 32.3%
 - ⑤ スポーツを始めたきっかけ
IH 出場者・不出場者に関わらず「スポーツが好きだから」（IH 出場者 42.4%、IH 不出場者 50.1%）が最も多い。IH 出場者は「親に勧められたから」（25.9%）、「兄弟姉妹に勧められたから」（14.8%）の順で全体の 4 割を占め IH 不出場者よりも多い結果となり、家族の勧めがスポーツを始めた強いきっかけとなった。IH 不出場者は友達に誘われたから（21.9%）が 2 番目に多くなっている。
 - ⑥ 家族のスポーツへの好意度
IH 出場者の家族は、スポーツが「好き」（71.9%）であり、家族のスポーツへの好意度は IH 不出場者（54.6%）の家族に比べて非常に高い。IH 不出場者の家族は、スポーツが「やや嫌い」（4.7%）と「嫌い」（1.4%）という回答が存在している。
 - ⑦ 家族が試合に応援に来る頻度
IH 出場者の「よく応援に来る」（67.3%）に対し、IH 不出場者は（39.9%）と 3 割程度少なく、家族のバックアップ、協力が影響する傾向がみえる。
 - ⑧ 高校で所属している競技の開始時期
「小学校から」（IH 出場者 59.1%、IH 不出場者 37.2%）が最も多く、IH 出場者の回答が約 6 割を占め、IH 不出場者のスポーツ開始時期より早いことが分かる。IH 不出場者は、「小学校から」は 4 割近くいるが、スポーツ開始時期が早い者と遅い者の二極化が見られる結果となった。

4 結果と考察

(1) 環境について

表 1～3 は、環境についての結果である。全体的に IH 出場者は“V 字曲線”を、IH 不出場者は“や

や右肩下がりの曲線”を描いている。IH 出場者・不出場者に関係なく、小学校時代は高い満足度を示している。これは、地域に根ざした少年団やクラブがあり、また家族の協力のおかげでそのような環境に身を置くことができていると考えられる。

環境に対する満足度が、IH 出場者・不出場者に関係なく、中学校時代において低い傾向が見られる。これは、高校時代の現在を基準に考えていることが一因と思われるが、現状として、中学校は専門の顧問がいるかいないかが満足度のカギとなっており、中学校では予算的なものの、少子化、地域格差等本人以外のことでのハンデを抱えていることも考えられる。また、高校の進学先を選択する際、IH 出場者は自分の目標にあった高校をおおむね選択しているが、IH 不出場者は競技以外の要素で選択する傾向があるため、進学した高校での環境が整っていない場合も多く、そのため満足度が低い結果になったと考えられる。

高校で新しくスポーツを始めた理由は、IH 不出場者は「中学校に希望するスポーツ環境がなかった」が約 3 割あった。また中学校にそのスポーツができる環境を整えることは、「競技力向上のために絶対に必要である」という意見が 4 割を超えており、小学校で行っていたスポーツを継続して中学校で行える環境整備を求める結果となった。

(2) 指導体制について

① 指導体制（指導スタッフの専門性や指導方針）に対する満足度（表 4）

IH 出場者は指導体制に対して、小学校時代(93.6%)、中学校時代（82.2%）、高校時代（95.2%）と高い満足度を示している。しかし、IH 不出場者の指導体制への満足度は、小学校時代（91.6%）、中学校時代（79.9%）、高校時代（74.7%）と下がり続けている。特に、高校時代の満足度を IH 出場者と不出場者で比較してみると大きな差がみられた。高校時代の部活動において、指導者の果たす役割は重要に思われる。

② 指導者に教わったことで大変ためになったと思うこと（図 3）

小学校時代では「礼儀・マナー」、「楽しさ」が回答数の 1・2 番目にくるが、3 番目は IH 出場者では「基本技術・戦術（39.6%）」、IH 不出場者は「感謝の気持ち（35.8%）」となっている。スキヤモンの発育曲線において神経系の発達小学校時代が顕著であるよ

表 1 練習場所への満足度

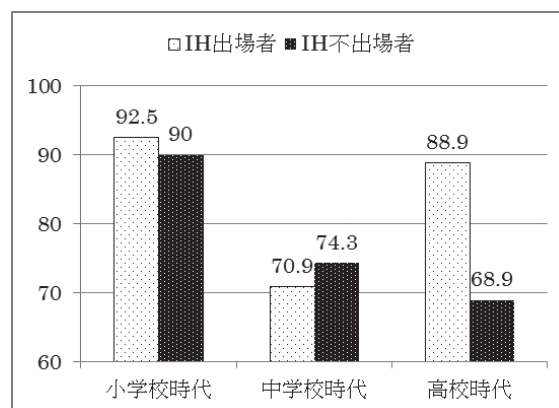


表 2 道具・用具などへの満足度

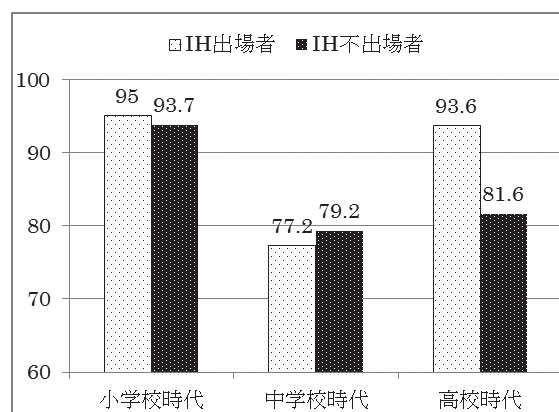


表 3 練習時間への満足度

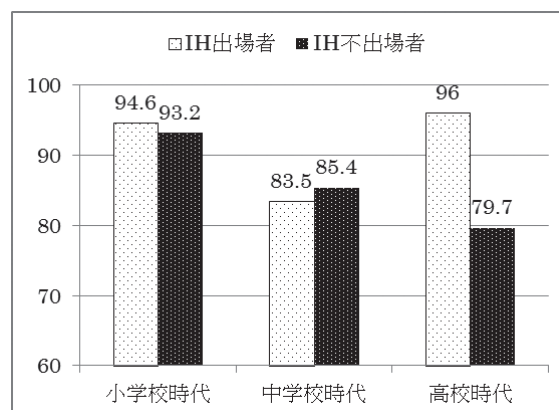
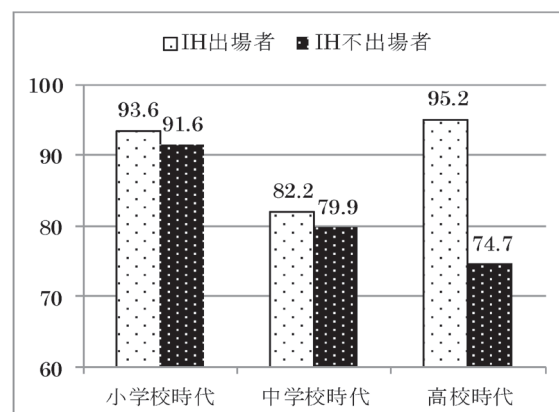


表 4 指導体制に対する満足度



うに、IH 出場者はしっかりと基本技術を小学校時代に習得しており、競技力向上にとって必須であると考えられる。

IH 出場者・不出場者ともに中学校時代では1番目は「礼儀・マナー」であるが、IH 出場者では2番目に「感謝の気持ち (36.7%)」、3番目に「楽しさ (35.4%)」

となり、IH 不出場者は2番目に「忍耐 (37.5%)」、3番目に「感謝の気持ち (27.8%)」となっている。特に中学校時代の部活動は、精神面や生活指導面も指導内容に多く含まれる傾向がある。その結果、忍耐や協調性などの回答が多くなったのではないと思われる。また IH 出場者の結果から推察されるように、中学校時代にスポーツ本来の“楽しさ”を教わることは今後の競技を行っていく上で非常に重要になってくるとと思われる。

高校時代では IH 出場者・不出場者ともに、「礼儀・マナー」、「感謝の気持ち」、「忍耐」が上位になったが、上位3つに続く回答では、IH 出場者では「より専門的な技術・戦術 (32.7%)」、IH 不出場者では「協調性・チームワーク (29.0%)」と違いが出た。IH 出場者においては IH 不出場者より、競技スポーツとしての専門的な指導を受けていると言える。

③ 指導者に教えてもらいたかったこと (図 4)

小学校時代では IH 出場者は1番目に「より専門的な技術・戦術 (36.1%)」となり、IH 不出場者は2番目 (26.3%) となっている。特に IH 出場者にとっては早い時期からより専門的な技術指導を望んでいたと思われる。

中学校時代では「より専門的な技術・戦術」、「基本技術・戦術」が1・2番にくるが、IH 不出場の3番目に「体力の向上 (18.1%)」が見られる。

高校時代では、「より専門的な技術・戦術」(IH 出場者 25.1%、IH 不出場者 39.1%) が上位に来ており、それ以外では IH 出場者では「楽しさ (14.8%)」、IH 不出場者では「基本技術・戦術 (22.9%)」と違いがみられる。IH 不出場者は、高校の指導者に「より専門的な技術・戦術」を教えてもらいたかったという回答が約4割と突出して多くなっていることから、高校での指導に満足していないことが伺える。

(3) 意識について

① スポーツをしていて楽しさを感じたこと (図 5)

小学校では IH 出場者・不出場者ともに「試合に勝ったとき」「よいプレイ (記録) がでたとき」「指導者に褒められたとき」の順になっている。中学校時代では、IH 出場者は「試合に勝ったとき」「よ

図3 指導者に教わって大変ためになったこと

	IH 出場者		IH 不出場者	
小学校時代	①礼儀・マナー	【49.3%】	①礼儀・マナー	【52.6%】
	②楽しさ	【47.5%】	②楽しさ	【44.7%】
	③基本技術・戦術	【39.6%】	③感謝の気持ち	【35.8%】
中学校時代	①礼儀・マナー	【51.9%】	①礼儀・マナー	【54.2%】
	②感謝の気持ち	【36.7%】	②忍耐	【37.5%】
	③楽しさ	【35.4%】	③感謝の気持ち	【27.8%】
高校時代	①礼儀・マナー	【53.4%】	①礼儀・マナー	【47.7%】
	②感謝の気持ち	【42.2%】	②忍耐	【35.2%】
	③忍耐	【32.9%】	③感謝の気持ち	【30.7%】
	④より専門的な技術・戦術	【32.7%】	④協調性・チームワーク	【29.0%】

図4 指導者に教えてもらいたかったこと

	IH 出場者		IH 不出場者	
小学校時代	①より専門的な技術・戦術	【36.1%】	①無回答	【26.8%】
	②無回答	【23.2%】	②より専門的な技術・戦術	【26.3%】
	③基本技術・戦術	【17.5%】	③基本技術・戦術	【18.4%】
中学校時代	①より専門的な技術・戦術	【40.5%】	①より専門的な技術・戦術	【40.3%】
	②基本技術・戦術	【26.6%】	②基本技術・戦術	【21.5%】
	③無回答	【21.5%】	③体力の向上	【18.1%】
高校時代	①無回答	【44.3%】	①より専門的な技術・戦術	【39.1%】
	②より専門的な技術・戦術	【25.1%】	②無回答	【25.8%】
	③楽しさ	【14.8%】	③基本技術・戦術	【22.9%】

いプレイ（記録）がでたとき」が1・2番になり、3番目に「試合に出たとき（41.8%）」、IH 不出場者は「よいプレイ（記録）がでたとき」「試合に勝ったとき」が1・2番になり、3番目に「指導者に褒められたとき（47.2%）」となっている。また、高校時代では「試合に勝ったとき」「よいプレイ（記録）がでたとき」が1・2番になり、3番目はIH 出場者が「きつい練習をやり遂げたとき（48.7%）」、IH 不出場者が「仲間と一つになれたと感じたとき（47.6%）」となっている。

この結果より、IH 出場者不出場者関係なく、試合で勝つことはスポーツの楽しさを1番感じることに繋がっていることが分かる。また生理的欲求から心理的欲求への移行に伴い、中学校時代での変化が高校時代での「きつい練習をやり遂げた」（競技スポーツ）と「仲間と一つになれた」（生涯スポーツ）という意識の差になり、競技力にも影響しているのではないと思われる。

② スポーツをしていて苦しさを感じたとき（図6・図7）

小学校時代は順位が入れ替わるのみで、「試合に負けたとき」「よいプレイ（記録）がでなかったとき」「指導者に叱られたとき」となっている。中学校時代、高校時代では「試合に負けたとき」「よいプレイ（記録）がでなかったとき」「指導者に叱られたとき」と同じ順位になった。どの年代においても選択項目が変わらない中、「試合に負けたとき」がどの年代でも1位を占めている。しかし、中学校時代の「試合に負けたとき」ではIH 出場者（68.4%）に対し、IH 不出場者（50.0%）と大きな差が出た（図7）。競技力向上においては、中学校時代の意識の中で、勝負へのこだわりは重要になってくるように思われる。

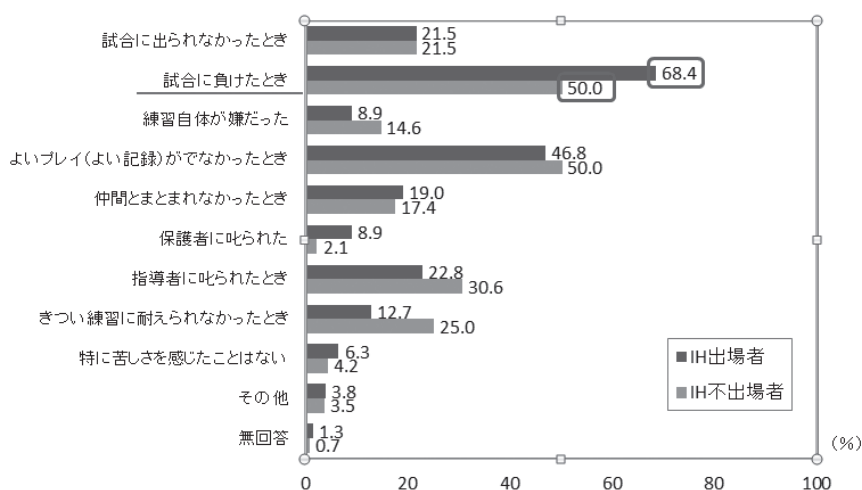
図5 スポーツをしていて楽しさを感じたこと

	IH 出場者	IH 不出場者
小学校時代	① 試合に勝ったとき 【77.1%】 ② よいプレイ(記録)がでたとき 【54.3%】 ③ 指導者にほめられたとき 【49.6%】	① 試合に勝ったとき 【77.4%】 ② よいプレイ(記録)がでたとき 【54.3%】 ③ 指導者にほめられたとき 【45.3%】
中学校時代	① 試合に勝ったとき 【67.1%】 ② よいプレイ(記録)がでたとき 【62.0%】 ③ 試合に出たとき 【41.8%】	① よいプレイ(記録)がでたとき 【61.8%】 ② 試合に勝ったとき 【61.1%】 ③ 指導者にほめられたとき 【47.2%】
高校時代	① 試合に勝ったとき 【76.4%】 ② よいプレイ(記録)がでたとき 【72.4%】 ③ きつい練習をやり遂げたとき 【48.7%】	① 試合に勝ったとき 【70.5%】 ② よいプレイ(記録)がでたとき 【66.7%】 ③ 仲間と一つになれたと感じたとき 【47.6%】

図6 スポーツをしていて苦しさを感じたとき

	IH 出場者	IH 不出場者
小学校時代	① 試合に負けたとき 【67.1%】 ② よいプレイ(記録)がでなかったとき 【36.8%】 ③ 指導者に叱られたとき 【36.4%】	① 試合に負けたとき 【62.6%】 ② 指導者に叱られたとき 【40.5%】 ③ よいプレイ(記録)がでなかったとき 【36.3%】
中学校時代	① 試合に負けたとき 【68.4%】 ② よいプレイ(記録)がでなかったとき 【46.8%】 ③ 指導者に叱られたとき 【22.8%】	① 試合に負けたとき 【50.0%】 ② よいプレイ(記録)がでなかったとき 【50.0%】 ③ 指導者に叱られたとき 【30.6%】
高校時代	① 試合に負けたとき 【65.4%】 ② よいプレイ(記録)がでなかったとき 【58.9%】 ③ 試合に出られなかったとき 【36.7%】	① 試合に負けたとき 【63.4%】 ② よいプレイ(記録)がでなかったとき 【54.4%】 ③ 試合に出られなかったとき 【31.1%】

図7 スポーツをしていて、苦しさを感じたこと



このように IH 出場者はスポーツをしていて楽しさを感じたのは、すべての時代を通じて、「試合に勝ったとき」が約 7～8 割で最も多く、苦しさを感じたのは、「試合に負けたとき」が約 7 割で、試合の勝負へのこだわりが非常に強いことが分かる。反対に IH 不出場者がスポーツをしていて楽しさを感じたのは「試合に勝ったとき」が小学校時代は約 8 割、中学校時代は約 6 割と楽しさを感じる度合いが徐々に低くなる。苦しさは、小中高校時代を通じて、「試合に負けたとき」が多いが、中学・高校時代では「よいプレイ（記録）がでなかったとき」が 5 割と、自己のプレイや記録への関心が高い。

5 まとめ

IH 出場者は、優れた環境（練習場所・指導者・家族）の中で、早い段階（小学校時代）から専門競技を決め、同じ競技を高校まで継続して行っており、競技スポーツとして専門的な指導をすべての時代で求めていることが伺える。反対に、IH 不出場者は、小学校時代のスポーツ少年団等や、中学校時代の部活動等ができる環境が少なく、専門指導者の下での競技を行った経験が少ない状況にあり、中学校時代には、礼儀やマナー・楽しさを味わうことが指導の中心であり生涯スポーツとしての指導を受けているように感じる。高校時代になると専門的な技術等を受けたいという欲求も出ているようである。

IH 出場者のうち、高校時代の指導者の教えで大変なためになったと思うことは「より専門的な技術・戦術」であり、小学・中学校時代の指導者にも、教えてもらいたかったと過去を振り返って思っていることがわかった。指導体制（指導スタッフの専門性や指導方針等）の満足度は、高校時代は高いが、中学校時代の指導体制には不満も見られる。IH 不出場者において、小中高校時代を通じて指導者の教えでためになったことは「礼儀・マナー」「楽しさ」「忍耐」などの精神面の要素が多かった。指導者に教えてもらいたかったことは、小中高校時代を通じて「より専門的な技術・戦術」が求められている。また、高校時代の指導体制の満足度は、IH 出場者に比べて低い。IH 出場者では試合での勝敗へのこだわりが非常に強く、スポーツをする楽しさや苦しさも勝敗が大きく影響している。今の競技を現在まで続けてこられた理由は、「楽しい・好きだから・仲間や両親・周りの支え」もあるが、中学校時代からは「勝ちたい・うまくなりたい」という気持ちが、競技を続けてこられた要因として大きい。

IH 不出場者では、試合の勝敗へのこだわりはあるが、IH 出場者に比べて勝敗へのこだわりは低い。中学・高校時代では「自己のプレイ・記録への関心」も高い。「好き・楽しい」などの気持ちで競技を続けている生徒が多い。一方で、小学・中学校時代に、練習・競技をもっと取り組んでおけばよかったという声もある。

6 おわりに

本県では、現在、「第 3 期競技力向上 5 か年計画」及び「次期国体に向けた競技力向上計画」のもと、関係団体と連携を図りながら、各種事業に取り組むことで、競技力向上を図っているところである。昨年の国体で、5 年ぶりに天皇杯 20 位以内を確保することができたことから、これまでの強化対策が実を結び、少しずつではあるが、成果が出てきたと感じている。鹿児島においては離島も多く、地域格差が大きい現状があり、今後、これまで以上に競技力を高めて行く為には、小学校時代から高校時代まで継続した指導が受けられように、中学校時代での指導環境の整備、スーパーアリーナを中心とする施設の充実など、環境面の改善が不可欠である。

また、本県には全国唯一の国立体育系専門大学の鹿屋体育大学があり、中体連や高体連が企画を立て、鹿屋体育大学とのより深い連携を図ることにより、体力測定など鹿児島県版の JISS を構築、長期休みなどを利用し、各競技におけるジュニアキャンプを行うことで、小学校時代からの一貫した指導や、指導者研修に役立てることができるのではないと思われる。本県における競技力向上により一層の充実・発展につながっていくと思われる。